



TESTAMENT

booklet note

Japanese

SBT 1483

伝説のハンガリー人ヴァイオリニスト、ヨハンナ・マルツィがEMIに残した全録音のテストメントによる再発売は本ディスクで完結する。同時に、偉大なるドイツ人音楽家、ヴォルフガング・サヴァリッシュの最初期のレコーディングとしても興味深い。交響曲の深遠な解釈はもとより、ピアニストとしても指揮者としても伴奏のスペシャリストとして知られている。モーツァルトのト長調の協奏曲とこの版のメンデルスゾーンの協奏曲はこれ以前にはリリースされていなかった。これには、スタジオでふたりがテンポについて衝突したからだとのうわさがある。ともかく、ここに欧州とアメリカでは初となるリリースが実現した。

ヨハンナ・エミリア・マリア・マルツィは、1924年10月26日、ルーマニアのティミショアラで生まれた。5人兄弟の末っ子で、6歳よりヨーゼフ・ブランディス（カール・フレッシュの弟子）についてヴァイオリンを始める。7歳の時、すでに70代だったイエネー・フバイ（1858-1937）のオーディションを受ける。フバイは事実上、20世紀初頭のハンガリーの著名ヴァイオリニストすべてを育てた人物である。フバイはマルツィに「君は世界の50位に入るなんてものではない。間違いなくトップ10のひとりだ」と言ったという。マルツィはフバイの個人レッスンに通うようになったが、フバイの助手でロンドンのクイーンズ・ホール管弦楽団の主要メンバーだったナードル・ジョルト（1887-1936）から教えるを受けることのほうが多かった。1932年、マルツィはフバイが学長を務めていたフランツ・リスト音楽院に入学し、ジョルトの教えるを受けながらフバイのレッスンに通った。ジョルトとフバイの死後は、フバイ四重奏団の第二ヴァイオリニストのフェレンク・ガブリエのレッスンを受けることが多かった。13歳にして、ハンガリーのいくつかの地方とルーマニアを巡る初コンサート・ツアーを実施。16歳

でレメーニ賞、17歳でフバイ賞を獲得し、1942年に音楽院を卒業している。翌年、ブダペスト・フィルハーモニーとチャイコフスキーの協奏曲を演奏。この時の指揮者は卓越したオランダ人指揮者のウィレム・メンゲルベルクであった。1944年3月のドイツ軍のハンガリー進攻の後、夫のベラ・チレリーとともに避難を余儀なくされ、この過程で‘無国籍状態’となりチロルに潜伏した。オーストリア人に逮捕され、長く厳しい尋問を受けるが、フランス軍により救われ、1946年まで夫婦は専属音楽家として留まることとなる。その後、スイスに移住し、ここでマルツィはエルネスト・アンセルメ指揮スイス・ロマン管弦楽団とチャイコフスキーの協奏曲を演奏することとなる。1947年10月にはジュネーブ国際音楽コンクールで入賞を果たした。

この受賞の翌年、マルツィはオランダのVARAラジオ放送でチャイコフスキーを演奏した。この放送局の音楽ディレクターがピアニストで、マルツィより10歳ほど年上のジーン・アントニエッティだった。ふたりは友人となりソナタ・デュオを結成する。最初のリサイタルはアムステルダム・コンセルトヘボウの小ホールで1949年2月25日に開催され、なかでもベートーヴェンのクロイツェル・ソナタの演奏が絶賛された。このリサイタルの数日前、メイン・ホールでハイン・ヨルダンス指揮コンセルトヘボウ管弦楽団とチャイコフスキーでデビューも果たし、その後オランダでも人気ヴァイオリニストとして出演を続けた。1957年まではコンセルトヘボウに少なくとも年に1回は出演している。その際は、同じプログラムで2,3公演をこなした。共演した指揮者は、オットー・クレンペラー、エドゥアルド・ヴァン・ベイヌム、ラファエル・クーベリック、フェレンツ・フリッチャイ、ユージン・オーマンディ、オイゲン・ヨッフムなどがある。アントニエッティとのデュオ活動もメイン・ホールに進出し、1956年2月及び1957年の1月2月にはこのホールでベートーヴェン・チクルスを演奏している。1954年のオランダ・フェスティヴァルでクレンペラー指揮ハーグ・レジデンティ管弦楽団と共演したメンデルスゾーンは大絶賛され、これに続く1957年アムステルダムでのヴィレム・ヴァン・オッテルロー指揮の同オーケストラ、1958年の若き日のベルナルト・ハイティンク指揮ロッテルダム・フィルハーモニーとの2回のベートーヴェン協奏曲も同様に高く評価された。マルツィはオランダのフローニンゲン州を頻繁に訪れている。スイスの中心部でも頻繁に活動し、さらにドイツでもキャリアを積んでいった。ベルリン・フィル・デビューは1952年、ヨーゼフ・カイルベルトとのブラームスの協奏曲だった。その後、オイゲン・ヨッフムとのベートーヴェンやアンドレ・クリュイタンスとのメンデルスゾーン、クリストフ・フォン・ドホナーニとのモーツァルトのト長調k.216、さらにはゲオルク・シオルティとのチャイコフスキーと続く。ク

レメンズ・クラウスとのモーツァルトはブリュッセルで、パウル・ファン・ケンペンとのベートーヴェンはパリでの公演だった。

1950年、マルツィはスイスの富裕な出版社主であるダニエル・チューディに出会う。チューディはアマチュアのヴァイオリニストで、楽器のコレクターでもあった。カール・フレッシュ愛用のピエトロ・ジョヴァンニ・グアルネリ・オブ・マントゥアをフレッシュの未亡人より購入していた。チューディはこれをマルツィに貸与したが、この楽器はマルツィの力強い演奏スタイルには合わなかった。そこでチューディはすぐに、別のヴァイオリンへの交換を申し入れる。1936年に入手した1733年製作のカルロ・ベルゴンツィーかつて所有していたイタリア人コレクターの名前から‘タリシオ’として知られている一である。1956年には彼女のために1733年製のストラディヴァリも購入。このヴァイオリンはクライスラーとフーベルマンも手にした名器であったが、マルツィはベルゴンツィーを愛用し、すべてのレコーディングにこちらを使用している。

マルツィのイギリス・デビューは1953年。50年代の大半はスイスのグラールスとパースシャーのグレナルモンドを行ったり来たりしてすごしている。グレナルモンドには夫が音楽学部長を務めていたトリニティー・カレッジがあった。さらにマルツィは、毎年スコットランド国立管弦楽団と共演した。ブロードでスタイルも良くチャーミングなマルツィは、舞台上で印象的な存在で魅力的な雰囲気を出しており、これらが音楽性をさらに香り高きものとしていた。レパートリーは広くなかったが、主要な協奏曲はすべて含まれていた。バッハのイ短調とホ長調、モーツァルトのト長調 K.216 とニ長調 K.218、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームス、チャイコフスキー、ドヴォルザーク、ブルッフ（ト短調）そしてバルトークである。アントニエッティとのリサイタルでは、ヴィターリのシャコンヌ、ヘンデルもしくはヴィヴァルディのソナタに続きバッハの無伴奏がよく演奏された。他にも、ベートーヴェン、シューベルト、ブラームス、フランク、ラヴェルのソナタをこよなく愛した。バルトークのラプソディー第1番とルーマニア民族舞曲、ストラヴィンスキーのコンチェルティーノ、シマノフスキーのノットゥルノやタランテラ、ラヴェルのツィガヌス、ミヨーの《春》やマルティヌーやファリャの小品も取り上げている。

1956年、マルツィはロイヤル・アルバート・ホールにてプロムス・デビューを果たす。演目は、サー・マルコム・サージェント指揮でブラームスの協奏曲だった。プロムスでの人気は大変なもので、1957年にはベイジル・キャメロンとメンデルスゾーン、1963年にはコリン・デイヴィスとブラームス、1966年にはサージェントとのメンデルスゾーンとバッハのシャ

コンヌのプロムス初演も果たしている。1957-58年のシーズンには、アメリカ・ツアーを敢行する。ニューヨーク・デビューは11月9日で、アンドレ・クリュイタンス指揮のニューヨーク・フィルハーモニックとバッハのホ長調協奏曲とバルトークのラプソディー第1番を演奏した。評論家には大絶賛され、ニューヨーク・タイムズのハロルド・ショーンベルグは彼女の最大の美点として「音楽家としてヴィルトゥオーゾたることより感銘を得ようとする意志」をあげている。このプログラムで2回公演し、1ヶ月後にアメリカの逆サイドでメンデルスゾーンの協奏曲を2度演奏した。この時はヴァン・ベイヌム指揮のロサンジェルス・フィルハーモニーとの共演だった。1958年の12月にはニューヨークに戻り、ニューヨーク・フィルとのメンデルスゾーンを4回公演した。この時の指揮者は当時の首席指揮者、レナード・バーンスタインだった。1960年にもアメリカとカナダでツアーを行っている。ニューヨーク・タイムズのアラン・ヒューゲスは11月7日にタウン・ホールで行われたニューヨーク・デビュー・リサイタルを聴き「ほぼ完璧と言える出来だった」とコメントしている。こうしてマルツィはアメリカを席捲してしまった。シンシナティー・エンクワイアーの評論家はマルツィを「魅惑のヴァイオリン界の女王」と呼んだ。62-63年のシーズンにも西海岸でピエール・モントゥー指揮ロサンジェルス・フィルとの共演でブルッフのト短調を演奏したが、それまでの成功はあまり浸透していなかった。

1959年の春には南アフリカでツアーを行った。同年8月、マルツィの名が世界中の新聞記事の見出しとなる出来事が起こる。エディンバラ音楽祭において、チェコ・フィルハーモニーが彼女との共演を拒否したのだ。理由はマルツィとその夫が、1944年のホルティ提督のハンガリー・ファシスト政権の協力者だったというものだった。事実、マルツィの唯一の政治的スタンスは純粋な反共産主義というもので、皮肉にも、夫チレリーとは離婚したばかりだった。「オーケストラのとった態度が理解できません。音楽という場所に政治を持ち込むなど言語道断です。」マルツィはメディアに語った。「チェコは私がかつてそこで活動していたことを認識しているはずです。同時に、私が共産主義者でないことも！今までの活動で私の共産主義に対する姿勢は明確になっています。何度招聘されても、鉄のカーテンの向こうで演奏することは断固として拒否してきたのですから。」なぜそうした態度を貫いてきたのかという質問に対してはこう答えている。「説明するのは難しいですね。どうしても行きたくないと思ったのです。たぶん、ハンガリー人としてそれは少々個人的な感情だと思います。」マルツィは彼女が生まれた国でさえ演奏したことがないことを強調し、「あなたがハンガリーを訪れたことがあろうがなかろうが、それは不当な行為に見えるでしょう。」と付け加えた。こうして、エディ

ンバラ音楽祭はロイヤル・フィルハーモニーとの共演と決まった。2つのプログラムでハンス・シュミット＝イッセルシュテットが指揮を務め、残りの1公演ではカレル・アンチェルに代わってワルター・ジュスキントが指揮、ソリストにルドルフ・フィルクシュニーを迎えた。ただ、たった1ヶ月前に戦後初めて娘マルツィに会うためにブダペストを出ることを許されていた72歳の母親がハンガリー当局によって許可を取り消されるのではないかという不安が常に彼女を苦しめ続けた。

1960年、2ヶ月に渡りマルツィは南アメリカでツアーを行った。このツアーの前に再婚し、再婚相手は他でもないダニエル・チューディだった。この夫婦は後にザビーネというひとり娘を授かる。マルツィは60年代も常に第一線で演奏し続けた。1964年、ジョン・プリッチャード指揮ロンドン交響楽団とともにロンドンでブラームスの協奏曲を演奏した際、ザ・タイムズの評論家は「マルツィ女史は威厳ある流儀で演奏するヴァイオリニストである。抒情的な音楽の中での温かみも、活気ある部分での推進力のあるエネルギーも彼女は出し惜しみをしない。三重音が駆使される第1楽章のパッセージは光彩を放っていた。G線とD線が奏でる情熱的な意志が彼女への称賛を絶対的なものにした。同様に、穏やかなパートにおけるこのうえなく優しい気品も素晴らしいものだった。この表現の副産物として確かに音の間違いやイントネーションの癖が見受けられたが、誰が不平に思うだろうか？（中略）アダージョでは最高音域での絹のような純粋な音色が際立っており、この濃密な部分で彼女が見せた表現的なコントロールと柔軟性がこの楽章を特徴づけている。最終楽章では、演奏によるめきを感じさせるところもあったが、彼女が最も重要と考えている男性的なリズム、力強く推進力のあるオクターヴでのテーマ、コードでの16分音符の敏速な運びなど、マルツィの持ち味が再度存分に発揮された。」

この評論のいくつかの文章は、後にマルツィのブラームス録音を聴いた人たちの感銘を言い当てている。しかしこれだけ素晴らしい認識をされながらも、ヨハンナ・マルツィは人気ヴァイオリニストの地位から去ってしまう。チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団と行った9回のコンサートのうち最後のものは1967年のことだ。ベルリン・フィルとの共演も1967年が最後である。この時はフランツ・アラース指揮のチャイコフスキーだった。裕福な夫を持ち経済的なモチベーションを失ったマルツィをエージェントが押さなくなったということもあるだろう。どちらかという遅くに母となったことで子育てに奔走する必要もあった。さらに過酷な現実が立ちはだかる。母親の釈放と交換条件に、1969年、ブダペストへの招聘を受けたのだ。運命を封じたハンガリー政府の恐喝に対する最後の降伏であった。さらに、スイスに戻った際

に合併症として患っていた A 型肝炎がより深刻な B 型であることが判明する。そんな状況下でも、マルツィは 1976 年まで人前で演奏しつづけ、同郷のイシュトヴァン・ハイデュとのデュオを楽しんだりしている。このふたりは、時々ヴェガ四重奏団のパウル・サボを加え、オール・ハンガリー人トリオとして演奏活動をした。弟子をとることもしている。マルツィは彼女が獲得できたであろうキャリアには行き着けていないことを感じていただろうし、肝炎治療のためのステロイドの副作用も気持ちを沈ませる要因になった。最晩年にグラールの自宅を訪ねた友人は、マルツィが幸せそうには見えなかったと感じている。1978 年 4 月に夫チューディが亡くなる。このすぐ後に、リューリッヒ近郊のリュシュリコンに居を移した。1979 年 8 月 13 日チューリッヒの病院で、マルツィは 54 歳の生涯を閉じる。死亡通知には「あつという間の重篤な病」と表記されたが、死因はがんであった。

ドイツ・グラモフォンでいくつかの録音を行った頃、ヨハンナ・マルツィは EMI の最も影響力のあるプロデューサー、ウォルター・レッグの目に留まった。コロムビアへの最初の録音セッションは 1954 年 2 月にロンドンのキングスウェイ・ホールで行われた。パウル・クレツキとフィルハーモニア管弦楽団のバックでブラームスの協奏曲を演奏したものである。

(Testament SBT 1037) 6 月にはさらなる録音が予定され、バッハの無伴奏のハ長調ソナタがアビーロード・スタジオで、モーツァルトのト長調とメンデルスゾーンの本短調の協奏曲がキングスウェイ・ホールで録音された。協奏曲はまだ 30 歳だったウォルフガング・サヴァリッシュが指揮したフィルハーモニア管がバックを務めた。しかしこの録音は当時発売されるに至らなかった。マルツィはバッハの無伴奏の録音を続け、7 月にアビーロードでパルティータニ短調、そして翌年 3 月から 5 月にかけて残りの作品を録音し、この最高傑作の比類なき全集を完成させた。1955 年のクリスマス直前に、クレツキ指揮のフィルハーモニア管とキングスウェイにてメンデルスゾーンを再録音。(これも SBT1037 に収録されている。) 録音日の 1 日はカデンツァのために費やされ、ベートーヴェンの 2 つのロマンスも収録された。1956 年の 9 月と 11 月に、ベルリンのエレクトローラ・スタジオでアントニエッティとシューベルトのヴァイオリンとピアノのための作品全集を録音した。これが、ヨハンナ・マルツィの公式レコーディングの最後である。気まぐれで独裁的な気難し屋のレッグが、単に興味を失ったのだった。幸運にも放送録音は多く残されており、リサイタルを完全収録したものやベートーヴェンの協奏曲やモーツァルト、ベートーヴェン、フランク、ラヴェルのソナタといった彼女のレパートリーの中で重要度が高いものがリリースもされている。

先に述べたモーツァルトとメンデルスゾーンの協奏曲がマルツィの存命中にリリースされなかった理由を芸術的観点で見つけることは難しい。どちらも素晴らしい演奏である。確かにモーツァルトのロンドの出だしが理想よりは少々精彩に欠くという反論が出来なくはない。それでもやはり、マルツィはどちらの協奏曲も大変良く弾きこなしており、かなり後になってから日本で初 CD 化された。この時のレコード評では、クレツキとの別ヴァージョンより優れているとする評論家もいた。30 歳にも満たないヴァイオリニストが同世代のサヴァリッシュと組んで録音することに自信がなく、父親のような、しかも熟練したヴァイオリニストでもあったクレツキとのほうが演奏しやすかったため再録音を行ったのかも知れない。（彼らの親密な関係は西側で最初にリリースされた CD のベートーヴェンの 2 つのロマンスに強く反映されている。）サヴァリッシュにしてみれば、これがメジャー・レーベルへの最初の録音だった。それまでの経験といえ、コンラッド・ハンセンとチャイコフスキーのピアノ協奏曲をアメリカの小さなレーベルに録音したくらいであった。なので、協奏曲のバックといえども妥協や出し惜しみが無い。この結果、この録音のすぐ後にドヴォルザークの交響曲第 8 番とスケルツォ・カプリチオーソをフィルハーモニア管と 3 日間で完成させ、世界的なレコーディング指揮者としてのキャリアをスタートさせることになる。マルツィがレコーディングから遠のいても、サヴァリッシュはレコーディング界に影響力を持ち続けた。これは伝説的ヴァイオリニストの波乱に満ちた歴史におけるもうひとつの謎といえる。

Tully Potter, 2012

訳：小林茂樹